

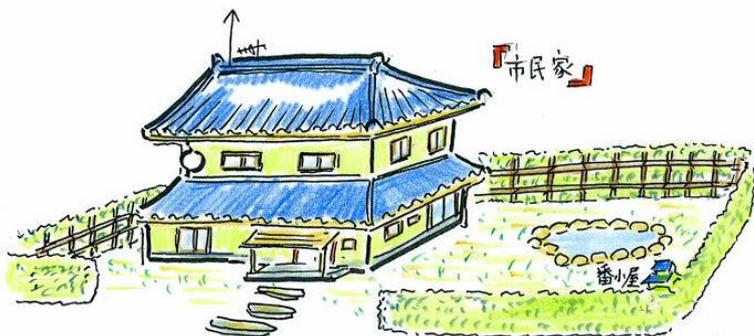
◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆

これまでのあらすじ

物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の^{ちゅうげん}中間 ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん^{えん}には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

点得幼稚園^{てんとく}の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだあい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。



ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの

火災予防奮闘記 をどうぞご覧ください。

「のうのうチエン、小学校って知ってりゅか？」と唐突に姫様に聞かれ

「小学校ですか？勿論ですよ、初等教育ですよ？確か満6歳になった次の4月から始まるんですよ。沢山の友達と一緒に勉強したり遊んだりって、たいそう楽しい所だと聞いてますが・・・それがどうかしたんですか？」と拙者が聞くと



「チエンはえんちゃんの誕生日、ちっていりゅきゃ？」とお聞きなさるので

「もちろんですよ。」と答える側からご助が割って入り

「姫様の誕生日は1月の25日じゃないですか！また一緒に大きなケーキを頂けやすね。」と上機嫌で話すのじゃった。



「ちょうなのよね。25日はえんちゃんの誕生日だから6歳ににやるの。」と姫様。

「あれれ、元気ないですね？どうしたんです？」とご助が聞くと

「あによね、えんちゃん、チエンとご助と遊ぶのが大好きなんだけど、小学生になっても今みたいにずっと一緒に遊べりゅの？」と

「何言ってるんでさ。あっしらと姫様はずっと一緒でさ。ねえ旦那様！」と話

しかけるご助には答えず

「姫様、何か気になることでもあるんですか？」と拙者がお聞きすると

「あによね、幼稚園で英語の勉強がはじまったの。ABCDEFGG ってきらきら星を歌いながらお遊戯したり、my name is EN chan. とかってとっても楽しいの。」とお答えになる姫様に

「あっ、あっしらと遊ぶよりも楽しいんですかい？」と驚くご助に



「ううん、チエンとご助と遊ぶのが一番にゃんだけど、お友達と勉強したり遊んだりするのも楽しいの。そうしたら、時々、チエンとご助が見えにくくなることありゆの。えんちゃんビックリして『消しゃないで!』て心の中でお願いするのよ。」と姫様が話すので

「だ、誰にお願いするんでやすか？」とご助が聞くと、姫様は

「閻魔様」

「え、え、閻魔様あ?何でです?」と拙者とご助が同時に叫ぶと



「だっちえ、ご助が地獄から戻ってきゆるには閻魔様のお許しが必要ですじゃ
って言ってたもん！」と得意げに話す姫様をご助は指さしながら

「ひっ、姫様あ、止めて下せえよ。閻魔様はあっしを懲らしめるために呼ぶん
ですぜ。叱られて戻るたんびにオネシヨじゃ格好になりやせんて！大丈夫でさ、
あっし達は消えたりしやせんから。」と胸をはるご助に安心したのか姫様は



「じえったいね？じゃあ、えんちゃんしずかちゃんとか遊びにいつてきゆる！」

と元気よく出かけていかれたのじゃった。

「気をつけて！」と姫様を見送った拙者達は、暫らく姫様の出ていかれた玄関で動けないでいた。

「そろそろでやすかね旦那様？」と最初に口を開いたのはご助じゃった。

「うん？ああ、そろそろじゃな。」と拙者が続くとそれっきり話さなくなった拙

者達の傍らに、いつの間にか猫のミーと小春が寄り添うように猫すわりしていた。



「しえん、そろそろにゃのか？」と小春が拙者に

「ご助たちも寂しくなるにゃあ」とミーがご助に

「さ、さびしいなんて、そんなことねえやい！」と駆け出したご助を追おうと
したミーを

「放っておいて下され！」と拙者は制し、ミー達に向き直ると

「姫様も今年で6歳じゃ。姫様には、これまでお主らや、ご助とともに沢山の
ことをお教えして参った。本にご苦勞様じゃった。もはや姫様の日常にわし等
は必要なくなったのじゃろう。」と、深々と礼をすると

「よせやい。俺は好きでやってたんだ、何も支援に礼など言われる筋合いじゃにやいぜ！」という小春のキャッツアイには光るものが・・・。



「ところで、えんちゃんが6歳になったらどうなるってんだよ？」と空気の読めない小春に

「小春殿、話の文脈から分らんのか？必要なくなった拙者らの姿はな、段々と姫様から見えなくなり、やがて記憶からも消えてしまうのさ！」と、拙者が少しイラッとしながら話すと

「おろ？支援。お主、いまワシにイラッとしたにゃ？」と細い眼をさらに細く

すると前足の鋭い爪をニューと伸ばし始めたのじゃった。



「止めにゃいか小春！支援の気持ちにもにゃってやれ。えんちゃんとの別れが近づいているんにゃぞ！」とミー殿が間に入って止めてくれ、思い直した小春から

「すまんな支援。えんちゃんに忘れられちゃあ悲しいわな。」と話しかけられ

「こちらも済まなんだ小春殿。仕方のないことでござるよ。姫様が成長されるのが一番でござる。頭では分かってはおるのじゃが、なかなか整理がつかませ

んのじゃ。心配なのは拙者よりご助でござるよ。あ奴の理解力はゾウリムシと同じ位ですからなあ」とご助を探しに拙者は番小屋へと戻ったのじゃった。

ご助の部屋にはいると、片町の赤玉から取り寄せた金沢おでんをつつきながら、加賀鳶大吟醸を一気飲みし、泥酔状態のご助がタバコを吸いながら寝ておったのじゃ。

枕元のガラスの灰皿には、消しそこなった山盛りの吸い殻から大量の煙があがり、部屋中に充満しておった。



「あーあ、折角禁煙しておったものを仕方のないやっちゃん。ご助、これご助！寝たばこをするでない！酒に逃げても何も解決せぬぞ。姫様が拙者らを忘れても、拙者達が忘れなければそれで良いではないか。それより姫様の成長を祝ってあげないか！」

「て、てやんでえー、そんなこたあ分かってやすってんだ！わっかっちゃいるが、あっしは淋しいんでさ！姫様と遊べないのなら、こんな仕事やってられやせんぜ！いっそのことこの番小屋ごと無くなっちまえばいいんでえ！」とご助が喚いた刹那

パーンツ と大きな音をたてガラスの灰皿が真っ二つに割れ、吸い殻が四方八方に飛び散り、何本かはご助の単衣の中に・・



「ひいっ、アチアチアチツ、た、助けて下せえ旦那様！」と叫ぶご助に

「ば、馬鹿者っ、おのれは何をしたのじゃ?!」と拙者が怒ると

「な、何もしてやせんぜ！あああああつ、だ、旦那様、火、火、火じゃ！布団から火が出てますぜ！」とご助

「見れば分かるわい！」と拙者は、手にした消火器のレバーをグツと握ったのじゃ。

ブシューツと勢いよく消火液が出て・・・出て・・・出てきませなんだ。

「嫌ですぜ旦那様、そいつはだいぶ前に一度使ったじゃねえですか。それで感電して一緒に地獄へ行ってきた・・・。」

「ば、馬鹿者！直ぐに新しい消火器に買い替えるよう金を渡したではないか！か、か、金はどうしたんじゃ？」と拙者が怒鳴ると



「へへへ、あっしも消火器を買いに出たんですがね、そのお福光屋さんの前を通ったら、あっしの消化液がね、福光屋に入れ、入れって言いますんで・・・
つい・・・」とご助。

「馬鹿者！何があっしの消化液じゃ！それを貸せっ」と拙者はご助が後生大事に抱えた加賀鳶大吟醸を引き取ると

「あああっ、な、何するんでえ！」と叫ぶご助を横目に、トクトクトクと大吟醸を燃える布団に掛け消火したのじゃった。



「あああ、止めて下せえ・・・ああああ、ぜ、全部掛けやがったなチキシヨーめ！」

「ふー、間に合った・・・が、おのれの馬鹿さ加減は一級品じゃな。」と拙者がいうと

「旦那様、今じゃもう一級、二級とか言わねえんですぜ。金ラベル、銀ラベル、黒・・・」

「それが馬鹿だと言うておる。誰が酒の話をしておる。そこに座れ、説教を・・・

うん？何か焦げ臭いな。」と拙者が消したばかりの布団を見ると、まだ少し燻
っておった。

「おっと、まだ消えておらんようじゃ。」と拙者が布団を広げると

ポツ、ポツ・・・と、再び火が上がりはじめたのじゃった。



「ひいい、大変じゃ？」と叫ぶ拙者に背後から

「だ、旦那様ダメじゃねえすか、布団に着いた火はなかなか消えない、大量の
水を掛けるべしってマニュアルにあったじゃねえですか、馬鹿じゃねえんで
すか旦那様は！」とご助の奴が

「お、おのれに言われとう無いわい！あわわわ……。ば、番小屋が、また番小屋が火事になるう！」とご助と二人番小屋の外へ走り出すと

「119, 119、火事の時には119」と、散水栓を手にした姫様が現れ、番小屋目掛けて水を掛け始めたのじゃった。



「チエン、ご助、怪我はにやいか？もうたいちょうぶ(大丈夫)じゃ。」と姫様に言われ

「姫様、勿体のうござります。この御恩、姫様が拙者らを忘れても、我ら生涯忘れませぬぞ。」と、ご助ともども平伏いたしましたのじゃ。

「にやんでえんちゃんがチエンとご助をわしゅれるの？」とお聞きなされる姫様に

「え？先ほど姫様は拙者達が見えにくたって・・・消えてしまうって・・・」

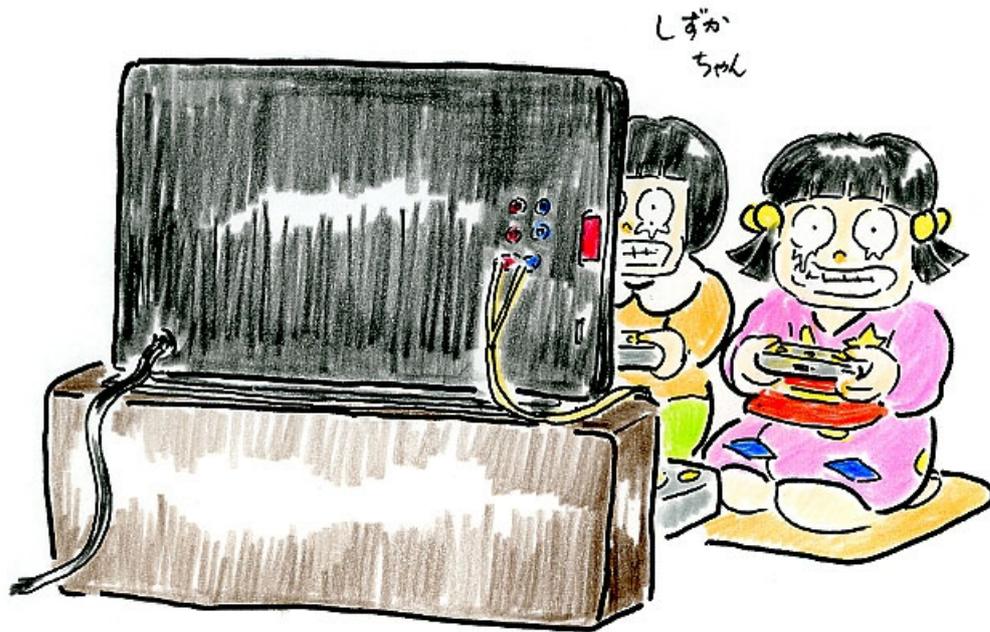
とご助が言うと



「ああ、ちよれね。しずかちゃんちでテレビゲームし過ぎて、お目めが痛くなっちゃってママに話したら、ゲームし過ぎると大好きなモノも見られなくなるわよ！って言われたの。チエンとご助が見えなくなるの嫌だから、もうゲームしないによ。」と姫様。

「えっ？姫様はあっしの姿がハッキリと見えますので？」というご助に

「あちゃりまえよ。ご助のお尻の火傷までハッキリ見えるろ。ありえ？ご助、にやんで泣きながら笑ってりゆの？ありえ、チエンまで、にやんで？」とお聞きなされる姫に



「へへへ、にやんでも無いでさ。ちょっと煙が目には沁みただけでさ。ねえ旦那様。」というご助に

「姫様、ご助の奴はね、寝たばこで火を出したから、今晚また、奪衣婆が迎えに来てオネシヨするのが怖くて泣いているんですよ。」と拙者がはなすと



「にゃーんだ、オネシヨならえんちゃん、昨日も今日もしちゃったもん。ぜーんぜんたいちょうぶ・・・」と姫様が話しておると、母屋から

「えーん、まーたオネシヨしたの隠してたわね！」と叫びながらお庭をズンズンとこちらへ向かってママさんが歩いて来たのじゃった。

「きゃー・・・ち、違うのママ、あれはえんちゃんじゃないの。ご助なのお」と逃げる姫様を追いかけるママのお顔を見て

「ひいいい、閻魔様!？」とご助は悲鳴をあげ気を失ったのじゃった。



「やれやれ、無邪気な姫様との付き合いはもう暫く続きそうじゃなあ・・・」

と、気絶したご助を、まだ煙の臭いがこもる番小屋に寝転がすと、

「良かった良かった。」と母屋の点検に出かけたのじゃった。

(おしまい)

ところでガラス製灰皿の中で、大量の吸い殻が燻焼すると、灰皿の内外の熱伝導の差で固いガラスも真っ二つに！火の着いた吸い殻が飛び散って大変危険ですぞ。それと布団に火が着くと、簡単には消えません。大量の水を掛け、消したと思っても安心せずに再燃しないよう注意しましょう。



支援くんの火災予防奮闘記は、今回の掲載をもちまして終了とさせていただきます。長らくご愛読いただきありがとうございました。

作者：金沢市民共済生活協同組合

前事務局長 小浦春基一

